J・コンドルが描いた城郭の写生(スケッチ)について
STUDY ON THE SKETCH OF THE CASTLE DRAWN BY J. CONDOR平山 育男^{*1}
Ikuo HIRAYAMA

This article examined five sheets of sketches of the castle drawn by J. Conder, the following points were clear. From the descriptions of castle sketch, three were *Osaka* Castle and two were *Edo* Castle. It seems that Conder was staying in *Osaka* for a long period of time from the end of December 1887 to the beginning of January the next year and left the sketch of *Osaka* Castle for collecting information in advance in the stone survey on the Inland sea area immediately after.

Keywords: *J. Conder, sketch, Osaka*

J・コンドル, 写生(スケッチ), 大阪

1 はじめに

J・コンドルの娘ヘレンから昭和41(1966)年頃に寄贈されたスケッチ・ブックが東京大学に保管される^{参考1)}。これはアルバム4冊、ノート・ブック1冊からなるもので、アルバムにはコンドル自らが整理して貼り付けられたと考えられる写生(スケッチ)や文字を記した厚手のメモ用紙が添付される^{注1)}。写生(スケッチ)の一部には署名やメモ、年代なども確認できるため、これらに基づき、鈴木博之は写生(スケッチ)の整理を行っている。鈴木によると1870~77年と1901年の年紀を持つ写生(スケッチ)は海外、1880~1900年のものが日本で描かれたとする^{注2)}。但し、これまで紹介された写生(スケッチ)は一部に限られ、鈴木自身、このアルバムについて今後の厳密な校訂が課題とする^{注3)}が、その作業は進んでいない。

一方、筆者はこの写生(スケッチ)の内、明治24(1891)年に発生した濃尾地震に関する2枚について既に論考をまとめている^{注4)}。また、明治20~21(1888~89)年の記載を有するものについては前稿で論考を示した。つまり前稿の考察から、コンドルにより明治20~21(1888~89)年に描かれた写生(スケッチ)は、それまであった鈴木らの成果とともにまとめるとTable 1のようになる。つまり、従来、この時期におけるコンドルによる写生(スケッチ)は鈴木が指摘する10枚(網掛部分)に過ぎなかったものの、新たに23枚、合計33枚に及ぶ写生(スケッチ)がこの時期、コンドルにより描かれたことが明らかとなった^{参考4)}。

また、この時期、コンドルが残した写生(スケッチ)は、いずれもコンドルが議事堂建築の石材調査^{参考3)}に赴いた先々で描いたものであることも明らかとなった。つまり明治20(1888)年に描かれた写生(スケッチ)は名古屋、岐阜において描かれ、日付も調査の行程と合致した。また、明治21(1889)年における写生(スケッチ)には、下関、広島、尾道及び瀬戸内海(Inland Sea)とあり、これも同年1月とする日付は行程と合致する^{参考4)}。

ところで、横長に装幀されたアルバムVol. 2^{注5)}には、本稿の標題に掲げたように日本の城郭を描いたと考えられる5枚の写生(スケッチ)が残され、その中の1枚には

Ozaka Castle[和訳: オザカ城]

とする記載を確認できる。これらの写生(スケッチ)については、日付の記入はなく、既往の研究を見ることができない。

そこで、本稿ではこの“*Ozaka* Castle”とする城郭の写生(スケッチ)5枚などについて、コンドルがいつ、何を描いたものかを示すととともに、その背景を明らかにすることを目的とする。

2 コンドルが描いた城郭の写生(スケッチ)

コンドルが描いた城郭の写生(スケッチ)は、アルバムのVol. 2に所収される(Fig. 1)。この頁には5枚の写生(スケッチ)が添付されるが便宜的に、上段向かって左側のものを写生(スケッチ)①、上段向かって右側ものを写生(スケッチ)②、下段向かって左側の

^{*1} 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

ものを写生（スケッチ）③、下段中央側のものを写生（スケッチ）④、下段向かって右側のものを写生（スケッチ）⑤とする。この内、“Ozaka Castle” とする記載を有するのは、写生（スケッチ）③で、画面向かって右上に当該の書き込みを確認できる。まずは各写生（スケッチ）の内容を簡単に説明しておきたい。

・写生（スケッチ）①

写生（スケッチ）①は石垣上に櫓を築き下部の石垣中央付近が門となる続櫓の形式となる。櫓の屋根は入母屋造で、棟の両端にやや高い鬼瓦を配する。石垣の中央からやや向かって左側にずれて門が配され、門扉を確認でき、門部分の画面正面側には野材の梁が掛け渡される。続櫓では門部分上部に庇と窓があり、向かって右側に櫓への出入り口と数段の階段を確認できる。そして、この出入り口が接続する石垣には、建物に対して階段状の石垣が直角に接続する。なお、建物の背面、画面向かって右側には樹木様のものが描かれる。

・写生（スケッチ）②

写生（スケッチ）②では向かって右側に入母屋造妻面を見せる櫓が建ち、向かって左側に高麗門形式となる門と、その両脇にのびる

塀を確認できる。また、高麗門の前面には升目が描かれ、高麗門と塀の前方は壕と考えられる。なお、画面の向かって左下には
time consuming [和訳：時間がかかる]
と判読できる書き込みがある。

・写生（スケッチ）③

写生（スケッチ）③は前景に入母屋造妻面の櫓側面を描き、背景には入母屋造で千鳥破風を有する櫓を描く。前景の櫓では石垣の目地が比較的精緻に描かれ、この上部に建物が築かれ、画面向かって左側には廊下が接続し入口があり、櫓妻側面には2カ所の窓を描く。なお、建物際に警備の人物を確認でき、その傍らに通路が描かれる。また、背景の櫓では石垣に向かって石階段を確認でき、恐らく千鳥破風下が出入口となるのであろう。

・写生（スケッチ）④

写生（スケッチ）④だけ他の写生（スケッチ）とは紙質が異なり、紙も一回り小さい。画面では前景に櫓があり、ここから矩形に塀がのび、高麗門が取り付く。

・写生（スケッチ）⑤

Table1 The sketch drawn by J. Conder in 1887-1888 J・コンドルにより 1887-1888 年に描かれた写生（スケッチ）

No.	Vol	p.	Pasting position: Everything is facing	貼付位置: いずれも向かって	Depiction point	描写地点	mouth year 年月	Depicted area 描写地						
								Nagoya 名古屋	Gifu 岐阜	Osaka 大阪	Simonoseki 下関	Hirosima 広島	Onomiti 尾道	Inland sea 瀬戸内
1	4	44	upper right	右上	Nagoya from Distance	名古屋 海上より	1887	1						
2	2	28	bottom left	左下	Okadaya Nagoya	名古屋 岡田屋	-	1						
3	2	20	upper left	左上	well at Shiukin ro Nagoya	名古屋 秋琴楼 井戸	Sep 1887	1						
4	2	24	upper right	右上	Yoshido... Shiukin ro Nagoya	名古屋 秋琴楼 葦戸	-	1						
5	2	26	upper left	左上	Plan of room in Shiukinro Nagoya	名古屋 秋琴楼 部屋の平面	-	1						
6	2	26	upper middle	中上	Room in Shiukinro Nagoya	名古屋 秋琴楼 部屋	-	1						
7	2	26	upper right	右上	Plan of room in Shiukinro Nagoya	名古屋 秋琴楼 部屋の平面	-	1						
8	2	25	upper left	左上	Perspective of Large Room in Shobanro at Gifu	岐阜 松畔楼 大部屋 内観	-		1					
9	2	25	bottom right	右下	Plan of Room in Shobanro at "Gifu"	岐阜 松畔楼 平面	-		1					
10	2	25	upper left	左上	Plan and Elevation of Corner Tokonamo Shobanro Gifu	岐阜 松畔楼 部屋角 床の間 平面 立面	-		1					
11	2	27	bottom left	左下	End of large room in Senzaki Hashoro Kyoto Osaka	大阪/京都 専崎 八勝楼 (?) 大座敷	-			1				
12	4	32	upper	上	Kioto[Osaka] Senzaki ya O Rui San	京都 [大阪] 専崎屋 おるいさん	January 1888			1				
13	4	25	upper left	左上	Shimonseki [ship, sea, land]	下関 [船 海 陸地]	Jan 1888				1			
14	4	25	upper right	右上	Shimonseki Noeth Passage	下関 北側海路	Jan 1888				1			
15	4	25	bottom right	右下	Shimonseki [islands]	下関 [島々]	-				1			
16	2	28	upper right	右上	Bakan daikichi ya [tokonoma]	馬関 大吉屋 [床の間]	Jan 1888				1			
17	2	54	upper left	左上	Ramma Daikichiya Shimonoseki	下関 大吉屋 欄間	Jan 1888				1			
18	2	54	upper right	右上	Ramma repeating mountains and "matsu"	大吉屋 欄間 連山と松	-				1			
19	4	26	bottom right	右下	Shimonseki Wada and oyasu	下関 ワダとおやす	-				1			
20	4	47	upper left	左上	Ko Hide Geisya Hiroshima	広島 芸者 こひで	Jan 1888					1		
21	4	32	bottom	下	O Takasan Kikawa Kinzo Kazariya Hiroshima	広島 かざりや 吉川金蔵	January 1888					1		
22	2	27	upper left	左上	Onomichi Hamakichi ya [interior]	尾道 浜吉 内観	-						1	
23	4	46	left	左	Ichiko Onomichi	尾道 いちこ	-						1	
24	4	46	right	右	O Ye San Onomichi	尾道 女性人物	Jan 1888						1	
25	4	25	bottom left	左下	Inland Sea [islands cloring]	瀬戸内 [島々 着色]	-							1
26	4	33	left	左	Inland Sea [woman]	瀬戸内 [女性]	1888							1
27	4	33	right	右	Inland Sea [woman]	瀬戸内 [女性]	1888							1
28	4	42	upper	上	Inland Sea [One set with two pieces]	瀬戸内 [2枚1組]	-							2
30	4	42	bottom left	左下	Inland Sea [sea and island]	瀬戸内 [島と海]	-							1
31	4	43	bottom left	左下	Inland Sea [sea and island]	瀬戸内 [島と海]	-							1
32	4	44	bottom left	左下	Inland Sea [sea and island]	瀬戸内 [島と海]	-							1
33	4	44	bottom right	右下	Inland Sea [sea and island 2scenes]	瀬戸内 [島と海 2景]	-							1
subtotl 小計								7	3	2	7	2	3	9
total 合計								33						

Legend: Shading is the sketch shown in Ref. 2) p :According to the sheet number of shooting at the University of Tokyo Architectural History Laboratory Depiction point:[Depiction point]
凡例:網掛けは参考文献2)に示される写生(スケッチ) p:東京大学建築史研究室で撮影のシート番号に準じる 描写地点:[著者による注記]

写生（スケッチ）⑤は階段状の石垣を見上げたもので、石垣の上に一部ではあるが塀と、足下に石を刻み込んだ矢来を確認できる。

3 コンドルが描いた城郭

写生（スケッチ）③にある“*Ozaka Castle*”の書き込みに対し、日本語を宛てれば“オザカ城”となる。なお、明治14(1881)年刊行の『A HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN CENTRAL & NORTHERN JAPAN.』においては、大阪の地図の題名に“PLAN OF ŌZAKA”とある^{注6)}ことから、“*Ozaka Castle*”の記載は“大阪城”と考えることができる。そこで以下、大阪城を中心として、各写生（スケッチ）が描かれた場所を考察したい。

・写生（スケッチ）①

大阪城においては櫓に設けられた門を数棟、確認できるが、続櫓の形態、画面向かって右側に配される入口と階段状の石垣などの描写に基づけば、写生（スケッチ）①は大阪城大手門における多聞櫓について、これを南側から潜り抜け、建物に対し北東から南西を向いて描いたものと考えることができる。つまり写生（スケッチ）①は大阪城大手門多聞櫓の北及び東側面^{注7)}を描く^{注8)}。

なお、(スケッチ)①では櫓部分に2カ所、窓部分に1カ所、文字の書き込みを確認できる。

・写生（スケッチ）②

写生（スケッチ）②では高麗門の向かって右側に櫓が接続し、高麗門が両側の塀よりやや高くなるが、戦前期の大阪城^{注9)}においてこのような条件を満たす箇所は見いだせず^{注10)}、写生（スケッチ）②は大阪城以外の場所と判断できる。

そこでこのような要件を充たす建物を国内の城郭において確認すると、江戸城の大手門、桜田門、清水門、類似するもので田安門が挙げられる。更に、この内、櫓、塀と高麗門との関係などをみると、両側塀の長さから、写生（スケッチ）②では大手門を北東から望んで描いたものと判断できる。

・写生（スケッチ）③

写生（スケッチ）③は“*Ozaka Castle*”の書き込みを有するもので、画面に描かれる建物の構成、詳細に記される石垣部分の目地の描写などに基づけば、画面手前に描かれるのは写生（スケッチ）①にみた大阪城の大手門の多聞櫓で、画面奥の建物は千貫櫓と判断できる。つまり、写生（スケッチ）③は、写生（スケッチ）①で描かれた多聞櫓の東側から西北西を向き、多聞櫓の東面と千貫櫓の東面を描いたものとなる^{注11)}。

なお、現状と比較すると、コンドルの写生（スケッチ）は多聞櫓の石垣を構成する各石の形、目地の形状なども極めて正確に模写されていることが判明する。

・写生（スケッチ）④

写生（スケッチ）④は門とその前に橋が描かれ、前景に櫓と矩形に接続する塀が描かれるのが、このような配置の地点を戦前の大阪城内では見いだせない。そこで、これも江戸城を中心に類似の構成を探すと、桔梗門を挙げるができる。つまり写生（スケッチ）④は壕を隔てて門の南東に立ち、北西を向いて門を描いたものとな。

・写生（スケッチ）⑤

写生（スケッチ）⑤では見上げる形で階段状の石垣を描き、その上部に塀と、角錐状に加工された矢来の一部を描いている。

現状の大阪城内において、このような形態の矢来はいくつかの箇所を確認できるが、階段状となる石垣との関係などから、写生（スケッチ）⑤は南仕切門跡の太鼓櫓跡において、北西を向き、西側の石垣と矢来を描いたものと判断できる。

4 城郭の写生（スケッチ）が描かれた時期

以上から、コンドルによる城郭の写生（スケッチ）においては大阪城が3枚、江戸城が2枚描かれることが明らかとなった。次いで、この写生（スケッチ）が描かれた時期を考察したい。

4-1 大阪城

J・コンドルが比較的長期に渡り大阪を訪れたのは、明治20(1887)年12月末から明治21(1888)年1月の議事堂建築の石材調査に際してのものと、明治24(1891)年10月28日に発生した濃尾地震後の調査におけるものが挙げられる。以下では両時期におけるコンドルの行動を再考し、“*Ozaka Castle*”とする写生（スケッチ）が描かれた時期を判断したい。

・明治24(1891)年 濃尾地震後の調査^{注12)}

濃尾地震後の調査において、コンドルは明治24(1891)年11月8日、大垣から列車で大阪に入って15日まで大阪に滞在し、以後は神戸に移動して横浜に戻った。この調査における調査地点を、コンドルは『AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.』^{注13)}に詳述するが、ここに大阪城の記載は見ることができない。しかも、この間における大阪での日程は比較的詰まったもので、期間の1日をコンドルは病で伏している。そのため、この時期における写生（スケッチ）の制作はなかったものと判断する。

・明治20(1887)年12月末から明治21(1888)年1月 議事堂建築の石材調査^{参考3)}

コンドルは、この時期の調査において、明治20(1887)年12月22日に大阪に到着し、年を越えて1月5日に神戸に移動し、翌日の船で馬関（下関）へ向かった。前稿では明治20(1887)年12月22日から1月5日までの動向は示せていなかった。そこで再度、この間におけるコンドルらの行程を示しておきたい。

この調査でコンドルと臨時建築局技師の加藤敏介は、山城丸で12月22日に神戸港に到着後、直ちに大阪に向かい^{注14)}、同日中に大阪には到着したとみることができる。以後の詳細は明らかではないが、明治20(1887)年12月29日付『大阪日報』には、

●建築局員 内務省臨時建築局雇英人コンドル氏及び同局五等技師加藤敏介氏ハ昨日当府庁へ出頭し今井書記官に面談したり^{注15)}

とあるため、コンドルと加藤は大阪において断続的に滞在し、12月28日に府庁の今井書記官と面談したことが確認できる。更に年を越えた明治21(1888)年1月6日付『神戸又新日報』では

●加藤内務技師及コンドル氏 先程より滞坂中なりし内務五等技師加藤敏介及び同雇御備英人コンドルの両氏は昨日午前來神の上同夕出港の東京丸にて馬関へ赴きたり^{注16)}

とある。ここでは“先程より滞坂中”との文言に注目すると、コンドルと加藤は年末年始を大阪において過ごしたと考えるのが妥当である。つまり、明治20(1887)年12月22日から明治21(1888)年1月6日の16日間における在阪は、時間的に極めて余裕を持ったものであったと判断することができる。

Fig. 1 The sketch of the castle drawn by J. Conder J・コンドルによる城郭の写生（スケッチ）

このように考えると、大阪城を描いたと考えることができる写生（スケッチ）①、③、⑤は明治20(1887)年12月末から明治21(1888)年1月における議事堂建築の石材調査時に描かれたと判断するのが妥当である。

4-2 江戸城

江戸城を描いた2枚の写生（スケッチ）に日付などが記されないため、制作時期を絞り込むことは難しいが、写生（スケッチ）②にある“time consuming”〔和訳：時間がかかる〕とする書き込みのある点は興味をそそられる。

コンドルは明治11(1878)年1月に日本へやって来て、早くも明治13(1880)年3月以後、皇居となった旧江戸城における山里正殿の造営工事に関わっている。コンドルの雇傭形態は当初、工部省からの出仕で、明治16(1883)年12月から半年の期限付きで解雇の期間もあったが、更に明治17(1884)年6月からは太政官に3カ年の契約として雇傭され、明治21(1888)年にも2回に渡り、現場の見学が確認されるという^{注17)}。

このようにコンドルは長期間に渡る江戸城-皇居と関わりを確認できるものの、山里正殿のコンドル案は頓挫した。上記2枚の写生（スケッチ）がいずれの時期に描かれたものか明らかではないが、書き

込みの意味を考慮すると、一連の工事において、コンドル自身がこぼした一言とすることができる。

5 コンドルが大阪城を訪れて写生（スケッチ）を行った背景

コンドルがこの時期に大阪城を訪れ、比較的詳細に城郭の写生（スケッチ）を行ったのは何故だったのかを最後に考えておきたい。

前稿で示した、同時代においてコンドルが残した写生（スケッチ）を見ると、33枚の内、8枚(24%)が人物で、12枚(36%)が風景、13枚(39%)が建物となる。但し、建物として描かれたものは何れも建物内部、もしくは建物の内部の欄間や建具、井戸など部分詳細とすることができる。特に建築については、これらの写生（スケッチ）に描かれた箇所がコンドルにとって興味の対象、換言すれば自ら描くことで獲得が可能な意匠の情報源として有用なものと認識があったからこそ、貴重な時間を割いてまで写生（スケッチ）に当たったとすることができる。

ところで大阪城における写生（スケッチ）に限れば建物内部を描いたものは1枚もない。確かに写生（スケッチ）⑤は、木造部分が失われ、内部を描くことのできない遺構となっていることも要因としては挙げられる。しかし、写生（スケッチ）①、③は櫓が現存し、

①The Ote-mon of The Osaka castle 大阪城大手門

②The Ote-Mon of The Edo castle 江戸城大手門

③The Ote-Mon of The Osaka castle 大阪城大手門

④The Kikyo-mon of The Edo castle
江戸城桔梗門

⑤The Minamisikiri-mon ato of The Osaka castle
大阪城南仕切門跡

Photo 1 The point where J. Conder drawn the sketch of the castle コンドルが城郭の写生（スケッチ）行った地点

内部の参観は可能である。しかし、コンドルがこの時、写生（スケッチ）の対象としたのは、他の13枚とは異なる建物の外観であった。つまり、写生（スケッチ）①、③を描くに際して、コンドルにとって必要な情報とは建物の外観、敢えて言えば写生（スケッチ）③においては詳細に目地まで描いた石垣であったとすることができる。

コンドルがこの時期に大阪を訪問した理由は、あくまでも議事堂建築の石材調査によるもので、やや長期間に渡り大阪に滞在し、この間に大阪城を訪れて写生（スケッチ）を残したと考えられるわけである。しかも、大阪城における写生（スケッチ）は外観が中心で、特に巨石が多数用いられた大手口や南仕切門などを写生（スケッチ）

Fig. 2 The sketch of the "Inujima" and "Inujima no Tsuzushima" drawn by J. Conder

J・コンドルによる“犬島”及び“犬島の鼓島”の写生（スケッチ）

したことは決して偶然ではない。しかもそれらの石は多く、直後にコンドルらが向かう瀬戸内から産出されたものが多く占めた^{注18)}。

つまり、このように考えるとコンドルが大阪城を訪れて写生（スケッチ）を行ったのは、これから訪れる調査地から産出される石材について、事前の情報収集の意味合いがあると言える。

ところで、コンドルのスケッチ・ブックには、Vol. 4には、未報告であったが犬島の景色を描いた2枚の写生（スケッチ）が存在する（Fig. 2）。本稿では向かって左側を写生（スケッチ）⑥、向かって右側を写生（スケッチ）⑦とするが、写生（スケッチ）⑥では“*InuJima no Tsuzushima*”[和訳：犬島の鼓島]、写生（スケッチ）⑦では“*InuJima*”[和訳：犬島]の記載を確認できる。

犬島は大阪城石垣に対して石材の著名な供給地の1つで^{注19)}、コンドルの一連の調査行程から考えると大阪城訪問後、下関・広島・尾道をたどる石材調査の途上、コンドルがこの地も訪れたと考えるのが妥当であろう。なお、写生（スケッチ）⑥には

To be returned to J. Conder

[和訳：J・コンドルに返却する]

写生（スケッチ）⑦には

Notes on back to be returned to J. Conder

[和訳：J・コンドルに返却するための但書]

とする書き込みを確認できる。但書は、内容から判断すると、写生（スケッチ）がコンドルによるもので、写生（スケッチ）を提出後、コンドルに返却されることを促す内容となっている。

前後の事情を勘案すれば、コンドルによる石材調査の報告は当然、この調査を熱望したベックマンらに伝えられ^{参考3)}、その際に写生（スケッチ）⑥、⑦が添付され、その返却を願ったものがこの但書と考えられる。

6 さいごに

J・コンドルが描いた城郭の写生（スケッチ）5枚について検討を加えたが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) 城郭の写生（スケッチ）5枚は描写内容から、3枚は大阪城、2枚は江戸城を描いたものと判断できる。
- 2) 写生（スケッチ）は描写内容から、大阪城については大手門の多聞櫓、多聞櫓と千貫櫓、南仕切門跡を描いたもの、江戸城については大手門、桔梗門を描いたものと判断できる。
- 3) コンドルが明治20(1887)年12月末から翌年1月初旬まで、やや長期間に渡り大阪に滞在して大阪城の写生（スケッチ）を残したのは、直後に予定された瀬戸内地方を巡る石材調査における事前の情報収集の意味合いがあったと考えられる。
- 4) コンドルのスケッチ・ブックVol. 4に所収される犬島と犬島鼓島を描いた写生（スケッチ）2枚は、コンドルによる議事堂建築石材調査に際し制作され、調査後に提出され返却されたと判断できる。

本稿は2018年度、鹿島学術財団の助成による研究の一部である。

謝辞

コンドルのスケッチ・ブック閲覧、提供に際しては東京大学加藤耕一、角田真弓の手を煩わせた。記して謝意を表する。また、図版の読解は金出ミチルによるものである。併せてお礼申し上げる。

参考文献

- 1) J. Conder: THE SKETCHBOOK, Vol. 1-4, 1870-1920
- 2) Suzuki, H.: Victorian Gothic no hokai, *Tyuokoronbizyutusyuppan*, 1996. 2 (in Japanese)
鈴木博之：ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊、中央公論美術出版、1996. 2
- 3) HIRAYAMA, I.: STUDY ON THE STONE SURVEY FOR THE CONSTRUCTION OF THE DIET BUILDING FROM 1887 TO 1888 BY J. CONDER, *Journal of Architecture and Planning* (Transactions of AIJ), 751, pp. 1765-1771, 2018. 9 (in Japanese)
平山：J・コンドルによって実施された明治 20(1887)年から明治 21(1888)年における議事堂建築用の石材調査について、日本建築学会計画系論文集, 751, pp, 1765-1771, 2018. 9
- 4) HIRAYAMA, I.: STUDY ON THE SKETCH DRAWN BY J. CONDER FROM 1887 TO 1888, *Journal of Architecture and Planning* (Transactions of AIJ), 754, pp. 2401-2407, 2018. 12 (in Japanese)
平山：J・コンドルが明治 20(1887)年から明治 21(1888)年に描いた写生（スケッチ）、日本建築学会計画系論文集, 754, pp, 2401-2407, 2018. 12

注

- 注1) 稲垣栄三：ジョサイア・コンドルのスケッチ・ブック、学燈 64-1、12～15 頁、昭和 42(1967). 1
- 注2) 参考文献 2) 96～119 頁
- 注3) 参考文献 3) 101 頁
- 注4) 平山：J・コンドルが濃尾地震被災地の調査において残した写生（スケッチ）について、日本建築学会計画系論文集 724、1385～1391 頁、平成 28(2016). 6
- 注5) アルバムの巻番号については、先行研究である参考文献 2)、101 頁に従う。ここでは以下の記載がある。
便宜的に、四冊の大型アルバムのうち、イタリアでの着色スケッチを多く含むもっとも薄手のアルバムを第一冊 (Vol. 1)、横長に装幀されたアルバムを第二冊 (Vol. 2)、もっとも厚手のアルバムを第三冊 (Vol. 3)、一冊だけと装本あるアルバムを第四冊 (Vol. 4) と名づけ《以下略》
- 注6) ERNEST MASON SATOW: A HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN CENTRAL & NORTHERN JAPAN.、PLAN OF ŌZAKA, 明治 14(1881)
- 注7) 建物名などは、大阪市：重要文化財大阪城 大手門・同南方塀・同北方塀 多聞櫓北方塀・多聞櫓 金明水井戸屋形・桜門・同左右塀 工事報告書、昭和 44(1969). 9、による。
- 注8) 現状では大手門多聞櫓と西の丸庭園の間には塀が設けられ、コンドルが写生（スケッチ）を行ったのは西の丸庭園側となるため、写生（スケッチ）を行ったのと同じ地点からの眺望はかなわない。そのため Photo 1①はコンドルが写生（スケッチ）を行った地点から前方に進んだ塀際からの撮影となる。なお、現状位置の塀は第四師団時代に建築され、少なくとも明治 41(1908)年測量 1/2 万地形図『大阪東北部』以後の地図で確認できる。
- 注9) ここでは現状とはせず、第2次世界大戦の戦禍を受ける以前、との意味合いで「戦前」とした。
- 注10) 類似する構成として第2次世界大戦の空襲で焼失した京橋口門を挙げることができる。但し、この門は両側に櫓があり、両脇の塀が門に比べて高い点がコンドルの写生（スケッチ）とは異なる。
- 注11) 写生（スケッチ）③に描かれる多聞櫓と千貫櫓の位置関係に基づけば、コンドルが写生（スケッチ）を行った地点は、東側に寄った南仕切門跡西側石垣付近となる。但し、この地点から眺望すると、現在は木々が生い茂り写生（スケッチ）③のような眺望はかなわない。そのため Photo 1③は多聞櫓にやや接近した地点からの撮影となる。
- 注12) 平山：J・コンドルによる濃尾地震被災地の調査地と日程について、日本建築学会計画系論文集 719、187～194 頁、平成 28(2016). 1
- 注13) J. Conder: AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.、*Seismological journal of Japan* 18、1～91 頁、明治 25(1893). 12
- 注14) 朝日新聞社：朝日新聞、明治 20(1887). 12/14、1 頁
- 注15) 大阪日報社：大阪日報、明治 20(1887). 12/29、3 頁
- 注16) 五州社：神戸又新日報、明治 21(1888). 1/6、2 頁
- 注17) 小野木重勝：明治洋風宮廷建築、44～49 頁、昭和 58(1970). 12
- 注18) 大阪城天守閣：大阪城史跡探訪、26 頁、平成 29(2017)、では、大阪城における巨石の 11 位までで不明の 1 石を除き、いずれも瀬戸内産出とする。
渡辺武：大阪城歴史散歩、保育社、80 頁、平成 4(1992). 6、も参考とした。
- 注19) 大阪城天守閣：大阪城史跡探訪、26 頁、前掲、によれば大阪城桜門枋形の蛸石(巨石 1 位)、振袖石(巨石 3 位)は犬島産とする。

STUDY ON THE SKETCH OF THE CASTLE DRAWN BY J. CONDOR

Ikuo HIRAYAMA ^{*1}

^{*1} Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

The sketchbook donated by J. Condor's daughter Helen from around 1966 has been kept in the University of Tokyo, in these albums, thick memoranda stamping the sketches and letters that Condor himself arranged and pasted were attached. Because some of the sketches include signatures, memos, and age, *Hiroyuki Suzuki* had already sorted out the sketch based on these. *Suzuki*, for this album, had required strict revision in the future, but this work had not progressed yet.

Meanwhile, the author summarized two pieces of the *Nobi* Earthquake that occurred in 1891 and the sketches drawn by Condor in 1888-89, together with the results of *Suzuki*, considering the content of 33 sheets. As a result, it was revealed that the sketches of 1888-89 were drawn by Condors as they went to the Diet building stone survey.

By the way, in album Vol. 2, 5 pieces of sketches depicting the castle of Japan had been left, and one of them can be confirmed as "*Ozaka* Castle". Therefore, this paper aims to clarify when and when Condor has drawn these buildings, such as five pieces of sketches of a castle with a note of "*Ozaka* Castle", and to clarify the background on which the description was made. The following points were revealed.

First of all, "*Ozaka*" can be thought of as *Osaka* from the original data in those days. Based on this, from the descriptions of castle sketch, three were *Osaka* Castle and two were *Edo* Castle. It can be judged that the *Tamon-yagura* of the *Ote-mon*, the *Tamon-yagura* and the *Senkan-yagura*, and the *Minami-sikiri-mon-ato* were drawn in *Osaka* Castle from the descriptive contents of sketches. *Edo* Castle can be judged as depicting the *Ote-mon* and the *Kikyo-mon*. It seems that Condor was staying in *Osaka* for a long period of time from the end of December 1887 to the beginning of January the next year and left the sketch of *Osaka* Castle for collecting information in advance in the stone survey on the Inland sea area immediately after.

In sketchbook Vol.4, two sketches depicting the scenes of "*Inujima*" and "*Inuzima no Tsuzushima*" were left. It is thought that these were also produced at the time of investigation of the stone in the Diet building by Condor and it can be judged that it was submitted after the survey.

(2019年2月8日原稿受理, 2019年5月13日採用決定)